

■お金をかけない住民参加の川づくり

有富孝一

現在淀川水系においては、流域委員会などの学識経験者、市民代表による委員会運営経費に事務局として議事録の作成や配付資料の作成のために多額のコストをかけ、行政職員の慢性的な長時間残業や、前例主義、お上完璧主義に基づく根拠資料の作成のための、無駄な業務発注が繰り返し行われている。特にダムの容量計算モデルは、50年以上前のそろばん時代の半旬（5日）単位で計算されているモデルであり、近年の観測技術の向上とコンピュータによる計算技術の向上で、必ずしも半旬単位のデータを使う必要は無い。最新の情報技術と観測データに基づくシミュレーションを、産官学で共有し、常にモデル精度の検証に努めるべきであり、設計コンサルタントに高い委託費を払って、分厚い報告書を毎年作成してもらう必要は無い。その結果、多大な事業費を必要とするダムの必要性を主張するが、地方自治体からは同意が得られないで意思決定プロセスに非常に時間とコストがかかっており、平行線をたどっている状況である。

一方、大分県の大野川では、住民のNPO団体が大野川流域ネットワークを自発的に発足された。大野川の住民は子供の頃から遊び場として大野川の中で泳ぎ、遊んで来た。現在でも河川プールなどが、上流のわき水を上手に導水する事で、水のながれる滑り台を作るなどで整備され、子供達が楽しそうに遊んでいる。また「カッパの川流れ」と称してライフジャケットを来て川下りを楽しむのは実に壮快で、心が安らぐ。そして、どこが深みになって危ないか、旧の取水堰堤が取り壊されて鉄筋がむき出しになっているので危ないかをすべて把握している。

<http://www.ohno-river.com/library/kasenpool/index.htm>

また、河川区域にあり、高台で決して浸水しないようなところの土地に、県の河川課と協議しながら廃材を使って自発的に山小屋を造って、流域ネットワークづくりの活動拠点としている。また、毎年、国土交通省の職員と河川調査という名目で、川下りを職員とNPO団体が参加して、大野川のすばらしさを肌で実感して理解している。

<http://www.ohno-river.com/kappakoya/koyanokoto/index.htm>

さらに、足の不自由な身体障害者向けにカヌー教室を開催し、全国競技の場にもなっている。行政は、NPO団体に頭が上がらないのである。

大野川はほとんどが谷間の河川で、堤防が少なく高さも低い。仮に氾濫しそうな地域には人家は無く、畑、田んぼが広がっている。

河川が地形の谷間の一番低いところにあるので、決して、取水しやすい河川ではないが、大野川では上流の小さな滝壺やわき水があるところに、人工的なコンクリートの小さな囲いを作り、そこに水を溜めて、水路を何キロも導水する事で、田畑へ農業用水を提供している。農業用水用のダムも最低限つくられているが、コンピューターが無い時代に直線が全くなく70年近く前にコンクリートと石積みだけで造られたダムは、白水ダムと呼ばれ、人工ダムとはいえ、自然の滝と遜色の無い美しい景観を作り出している。

<http://allabout.co.jp/travel/meisho/closeup/CU20061004A/>

今でも新規ダムの開発計画が出ているらしいが、後世に自信を持って残せる事業を実施してほしいと、本気で主張している。

このような大野川なので、河川管理者よりも、住民の方が、川の事、源流の事を知り尽くしており、上流域の乱開発には反対運動を起こし、流域住民が一丸となって大野川の自然を守ろうという気運が高まっている。こういう中では河川整備計画の立案は、スムーズに進んだ。

<http://www.qsr.mlit.go.jp/oita/seibi/>

淀川水系では、節水を呼びかけたり、渇水対策ダムが造られようとしているが、大野川は、決して雨が多い流域ではないにも関わらず、大野川の水量は豊富で水には困っていない。

なぜなら、阿蘇山麓を源流にして作られた上流の滝壺やわき水をすべて知り尽くしており、上手に水循環ネットワークを十七世紀から整備して利用しており、農業用水として利用したり（水車による自然の力で水をくみ上げている）、川魚の養殖用プールに利用したり、業務用、家庭用の簡易水道として利用している。その使用された水を大野川に還元する事で、大野川の水位と流量が確保されるので、大野川のコセプトは「水をどんどん使いましょう（健全な水循環系の保全）」というコセプトで流域活動を行っている。水は滞留させては水質が悪化し、大野川の水位と流量が減少して、魚や植物、昆虫等の生態系を乱すだけなので、どんどん使って、新しい水を大野川に還元する必要があると主張していた。

<http://www.ohno-river.com/kondankai/kappa-daigaku/2005daigaku/mizunotabi01/mizunotabi01.htm>

このような、住民参加の川づくりがうまくいった背景には、NPO の大野川流域ネットワークの地元ネットワークづくりがとても重要な役割を担っており、ほとんど広報費用をかけずに、大野川を良くして行こうという気運を高めることが出来、NPO が大野川流域懇談会で河川整備計画に意見を述べる事で、要所要所で重要な意見を取り入れることが出来、それは住民のほとんどが納得できる意見なので、スムーズな意思決定が出来たのである。

このように、すでに流域ネットワークのような NPO で活躍している人の意見を、参考意見として取り入れる事で、現在淀川水系で抱えている根本的な原因が何かを発見するきっかけになると考えられる。

また、このような政策決定がスムーズに出来たという過程をつぶさに調査した社会学者がおり、その知見は特筆すべきものであり、淀川水系流域委員会に参加してもらう価値は十分あると考えられる。

<http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/handle/123456789/358>